◆体験版◆

# 眠り姫を起こす前に「する」だろ、普通？

夏目　棗（なつめ　なつめ）

## ❑❑ 注 意 事 項 ❑❑

普通にこのＰＤＦファイルを開くとウインドウサイズで開きます。パソコンの設定にも拠りますが多少縮小されて表示されるのではないかと思います。文章を読むには問題ありませんが、ＣＧを鑑賞する場合は多少拡大（１２５％くらい推奨）して戴いた方が綺麗に表示される筈です。

また、「Shift」＋「Ctrl」＋「N」で希望の頁へジャンプできます。

❑❑ 登場人物 ❑❑

●千田 奈津(ちだ なつ) ＝ 椎葉学園(しいばがくえん)二回生。身長：１５８㎝、体重：４５㎏、スリーサイズ：８３(Ｃカップ)・５２・８７。寛和、康輔とは三軒並んだお隣さんで腐れ縁の幼馴染み。今年はクラスまで同じ。女子バスケ部。

●一木 寛和（いちき ひろかず）＝ 椎葉学園二回生。中肉中背で これといって取り柄はない。帰宅部。

●加持 康輔（かじ こうすけ）＝ 椎葉学園二回生。中肉中背で外見や言動は〝ちょい悪系〟だが実際は小市民な性格。帰宅部。

「眠り姫を起こす前に〝スル〟だろ、普通？」
弁当を食べ終えた昼休み。いつものように窓際の一木寛和（いちき ひろかず）の席にツルんで〝お莫迦ネタ〟を振ってきたのは幼馴染みで悪友の加持康輔（かじ こうすけ）である。
「い、いきなり……な、何の話だよっ！」
『スル』という表現に些かの動揺を隠せない寛和に康輔が笑いながら言った。
「だからよ、おとぎ話にあんだろ？ ……眠ってるお姫さんを 王子がキスで起こすって、あれよっ！ ……ふつう、眼の前で熟睡してる女が居たらよ……キスなんかより、スル事はあんだろ……って話よっ！」
「あんたたちって、本当に、おバカよね？」
そこへ、前の席から冷やかな顔で振り返ってツッコミを入れてきたのは同じく腐れ縁の幼馴染み千田 奈津（ちだ なつ）だった。
寛和、康輔、奈津の三人は、家が三軒並んだお隣さんで腐れ縁という他ない幼馴染みだった。その上、今年はクラスまで同じだった。

「ホント、あんたたちの頭の中って、**エロエロな妄想だけ**が詰まってるのね？」

奈津が心底呆れたように言った。

「――んだよぉ？　……健全な青少年だったらキスだけで終わるかってのっ！　……なあ、ヒロっ？」

（お、俺にフルなよぅ!?）
微妙に視線を逸らす寛和に奈津が諭すように言った。
「寛和さあ……友だちは選んだ方が良いわよっ！ ……康輔って、最近 あたしの顔を見れば『ヤラせろ』しか言わないモンっ！」
「――んなコトねえぞっ！ ……『オッパイ揉ませろ』も毎日言ってるだろがっ！」
「だ、だから……同じコトだってのっ！」
そう言いながら奈津は自分の胸に向かって伸びてくる康輔の手から逃れようと寛和の背後に廻り込む。
「ヤダってば……さ、触るなーっ!?」
（……って、奈津……あ、当たってる、背中に当たってるぅ!?）
胸をガードするように寛和の背中に、ぴとっ、と貼りついた奈津の柔らかな双つの膨らみが彼の煩悩を刺激する。
そんな状況を判っているのかいないのか、康輔が尚も指先を、わき、わき、させて奈津に迫る。
「別に減るモンでもねえだろがっ！」
「いや、減るからっ！ ……康輔に揉まれたら、絶対、減るからっ！」

「――んなワケ、あるかってのぉ!?……つうより、ナツの場合 もうちっと男に揉まれて大きくならねえとダメだろ、なあヒロぉ？」
その康輔の言葉に奈津が真っ赤になって反論する。
「う、うるさいぃ!?……よ、余計なお世話だ～っ！」
そして尚も、わき、わき、と卑猥な蠢きを見せる康輔の指先を片手で牽制しながら奈津が更に寛和の背中にしがみつく。
「お、おいぃ!?……な、奈津……離れろってぇ!?」
「んんっ？」
漸く二人の状況に気づいたのか康輔が揶揄(からか)うように言った。
「……ヒロよぉ、ナツの残念なオッパイじゃあ、感じねえよなあっ？」
「（いや、結構）……お、思ったより……柔らかい……」
思わず本音が口から零れ、寛和の脳天を奈津の鉄拳が見舞っていた。
――ごいんっ！
「やっぱ、寛和も康輔と同じ穴のムジナねっ！」
「そう、そう、男子なんて、み～んな、助平ぇよぅ！」
そこへ奈津の親友でクラス委員長の津島 智陽(つしま ちはる)が加わって、昼休み

が終わるまで康輔と寛和は散々コキ下ろされたのだった。

――そして、放課後。

帰り支度を始めた寛和を呼び止めた康輔がメールを打ちながら言った。

「まあ、待て……ヒロに良いモン見せてやっからよぉ……」

そして、待つ事、数分。

教室の戸が開いて女子バスケ部のユニフォーム姿の奈津が入って来た。

「何よ、もぉ！　……部活始まっちゃうのにぃ！」

そう言いながら寛和の姿を眼に止めた奈津が少し恥ずかしそうにユニフォームの胸元を両手で隠した。

（た、確かに体育館ならともかく、教室でこのユニフォームは……ちょっと、エロいかも……）

寛和の視線が自分の姿に、ねっとり、と絡みつくのを困ったように見返して奈津が言った。

「……そ、それより、寛和もいたんなら……ノートも寛和に見せて貰えば良いじゃないっ！　……あ、あたしより頭良いんだしぃ！」

「いや、ヒロのノートは読めねえの知ってるだろ？」
「あ、そうか……」
「ちょ、そこであっさり納得するなっ！」
しかし、寛和の抗議をスルーして鞄からノートを取りだして手渡す奈津を見遣った康輔があからさまに残念顔をして言った。
「それにしても、女バスのユニフォームってのは、何でそうも色気がねえんだっ？」
「だから、何の話よぅ！」
コメカミに、ぴき、ぴき、と怒りマークを浮かべた奈津が康輔を睨む。
しかし、康輔は至ってマイペースだ。
「最近じゃ、短距離だって、ハイジャンだってよぉ……水着みてえなエロエロなユニフォーム着てるじゃんかよぉ？」
「あ、あんた ねえっ！ ……そ、そういうの着てるのは……お、オリンピックとか、国際大会とかに出場するような……ハイレベルな選手だけですっ！」
「そう言やあ、ウチの陸上部はブルマか……」
（あれはあれで、エロいっちゃあ、エロいけどな……）
「しかし、ウチの陸上部だって水着で走ればインハイだって夢じゃねえのによぉ？」

「だ・か・ら〜っ……ウチだけでなく学園の陸上部は、そんなの着てないってっ！」

呆れ顔の奈津に構わず康輔がボヤいた。

「しかし、な……ヒロに良いモン見せてやるって約束した手前よぉ、こんな色気のねえユニフォームじゃ、詐欺ってモンだろぉ？」

「いや、だから……な、なに……する……つもり……」
背後に廻り込んだ康輔に奈津が警戒するように身構えた。

「ほんじゃ、ヒロよぉ……よっく眼に焼きつけろよ、っと……」
そう言い残して康輔の姿が掻き消えた……ように見えた。

――次の瞬間、

「わきゃあああぁぁあああああっっ!?」

悲鳴をあげた奈津の下半身に身を沈めた康輔が、あろう事かユニフォームの短パンを摺り降ろしていた。

そして、寛和の眼の前に淡い薄紫のショーツが晒されたのだった。
「こ、こ、こ、コウスケの、**ドスケベーっ!!**」
「ほげぇえええっ!?……ぐ、グーは……よ、よそうなっ！」
康輔の顔面に鉄拳を沈めて奈津が短パンを摺りあげる。そして――、
「み、み、み、見たっ？」
睨みつけられた寛和が微かに頷く。
「……ち、ちらっ、と……」
「わ、忘れてっ！……忘れなさいぃっ！」
「（む、無理っ！）わ、判った……」
本音をひた隠す寛和に、ちろんっ、と睨みを利かせて奈津が康輔の襟首を掴む。
「良いっ？ ……ノートのお礼はオレンジサワーだからねっ!! ……そ、それと、部活終わるまでにノート写しときなさいよねっ！」
そう言ってから、ちらっ、と視線を寛和に振ってから、また康輔を睨みつけて奈津が小声で囁いた。
「……ぃ、良いわねっ！」
「お、おう……予定通り……な……」

何か眼と眼で頷き合ってから奈津はまた、ちらっ、と視線を寛和に振ると、そそくさ、と戸を開けて教室を出て行ったのだった。
取り残された寛和が我に返るのに数分を要した。
「……そ、それじゃ……お、俺は帰るな……」
「お、オレを一人にしないでくれ～～っ！」
泣きが入った康輔に付き合わされる寛和であった。

――そして、ノートのコピーと買い物（お礼）を済ませて康輔が戻ってから、用もないのに付き合わされて待たされる事、数時間。
漸く、部活を終えた奈津が制服に着替えて教室に戻って来たのだった。
「遅(おせ)えよ、ナツ～っ！」
「し、仕方ないでしょ……しゃ、シャワー浴びてきたんだから……」
「ふ～んっ？ ……何でまた、今日はシャワーを浴びてきたんだ？」
「う、う、うるさいっ！ ……毎日、部活の後はシャワー浴びてますっ！」
「どれ、どれっ？ ……おっ♪ ……いい匂いがするじゃねーかっ♪」
懲りもせずに康輔が奈津の背後に忍び寄る。

「ば、バカ康輔っ！……っんとに、あんたってスケベっ！」
「まあ、まあ、オッパイ揉んでやるからよ……」

「こ、こらあっ！……んっ、やだっ……このぉ！」
――ごいんっ！

康輔の顎にアッパーを喰らわせて飛び退いた奈津が眉間に縦筋を刻んで叫んだ。
「――ったくぅ！ ……すぐ触ろうとするんだからっ！ ……それより、ノート写しは終わったのっ？」
「おうよ、サンキューなっ！」
差しだされたノートを受け取った奈津がもう一方の手も差しだす。
「ちぃ！ ……覚えてやがったのか……ほれよっ！」
渋々康輔がパックのオレンジジュースを渡すと奈津が不満たらたらで言った。
「もおぅ？ ……オレンジサワーって言ったじゃんっ！」
「んな洒落たモン購買にあるかってのっ！ …いらねえなら、オレが飲むからよっ！」
「あっ、こら、あたしんのだってばっ！」
「イッキ、イッキっ！」
「いや、だから～、オレンジジュースを一気飲みしてどうするん……って、何これ？……美味しいっ♪」
「だろ、だろ？ ……ほれ、イッキ、イッキっ！」
「やだ、ホント……美味し…ぃ……」
一気に飲み干した奈津の身体がそのまま、こてっ、と頽(くずお)れる。

あたかもそれを予測してでもいたように平然と奈津の身体を抱き止めた康輔が寛和に向かって、にまっ、と笑い掛けた。

「ほれヒロ、脱がせるぞっ！」

「はあっ？　……ぬ、脱がせる……って？」

意味が判らず訊き返す寛和に康輔が平然と言い放った。
「さっきのオレンジジュースにな、即効性の睡眠薬を仕込んでおいたのよっ！」

言いながら早速奈津のブレザーを脱がしてしまった康輔に寛和が慌てた。
「……即効性……睡眠薬……ちょ、待てぇぇぇっ!?」

康輔の言葉を反芻して漸く現状認識に至った寛和だったが、だからといって彼の常識はその現状認識を受け入れられずにいた。
「……っとぉ、流石に『まぐろ』状態だと 脱がすのに手間が掛かるな？ ……んでもよぉ、暴れねえだけ良いっちゃあ、イイか？」
未だ、おろ、おろ、と視線をさ迷わせる寛和に構わず康輔が奈津のベストも脱がし始めた。
「あに、してんだよっ？ ……ヒロに下半分を譲ってやってんだからな、早く スカートを脱がせろってのっ！」
「す、す、スカートって……な、奈津のか？」
「――ったりめえだっつうのっ！ ……ほれ、オレがナツを支えているから 早く脱がせろよっ！」
（ほ、ホントに……い、良いのかよっ？）
途惑いつつも奈津の前に腰を落としてスカートに手を掛けた寛和に康輔が指示を与える。
「スカートの横によ、ファスナーがあるから先にそれを降ろすんだよ……」
（な、何で、お前……そうゆう事、そんなに詳しいんだよ……）

幾分嫉妬混じりの途惑いを滲ませたままファスナーを降ろしてスカートを脱がせた寛和の眼の前に淡い薄紫のショーツが現れた。

「――ったく、色気のねえパンツだが……ってヒロよぉ、お前、なに食い入るように見てんだよっ？」

「べ、べ、別に……そ、そんな風に……み、見てねえって……」
「さっきだってよ、見せてやったじゃねえか？」
確かに数時間前、康輔が奈津のユニフォームの短パンを摺り降ろした時も同じ薄紫のショーツが寛和の眼の前に晒されていた。しかし、直ぐに奈津は短パンを元に戻してしまったし、何より今程近くはなかった。
ショーツの、こんもり、と膨らむクロッチ部に、ちら、ちら、と視線を投げる寛和を可笑(おか)しそうに見遣って康輔が言った。
「ぐふふっ……もっと良いモン見せてやるから、そのまましゃがんでろよっ♪」
笑いながら奈津を片手で支えると康輔はショーツのクロッチ部に手を掛けて横に摺らしてしまったのだった。
その瞬間、『眠り姫』の肘が康輔の鳩尾(みぞおち)に入った……ような気がした。
「ぐふっ!?」
康輔も何故か身を捩ったような気がして寛和が不安そうに訊いた。
「お、おい、康輔ぇ!?……ほ、ホントに奈津は眠ってるのか？」
「お、おうよ……ぐ、グッスリだぜ……」
「だ、だって……い、いま、奈津の肘が……は、入らなかったか？」

そう訊きつつも寛和の視線は奈津の晒された股間に釘付けになっていた。幾分濃い目の下草とスリットから眼が離せない寛和を揶揄(からか)うように康輔が言った。

「これだから チェリーくんは嫌だってのっ！……女は眠っててもマンコ弄られりゃ、反応するってのっ！」

「……って、康輔っ！……お、おまえ…ど、どこ…触ってぇ!?」
康輔の指が摺らしたショーツの隙間から秘唇を無遠慮に弄(まさぐ)っていた。

「チンポはよぉ……チェリーなヒロに挿(い)れさせてやるが、その前にオレがよ～っく、濡らしといてやらねえとよぉ？」

「お、お前だって……ど、ど、童貞だろっ？」
「ふふん、残念だったな……オレはとっくに経験済みだぜっ！」
（う、嘘ぅ？）
「まあ、今からナツのマンコで『脱・童貞』させてやるからよっ♪」
「い、いや……ね、眠ってる相手とシちゃうなんて……そ、そ、それに……な、な、奈津が……ば、ヴァージンだったら、どうすんだよ？」
「平気だって……ナツも、もう経験済みだし……」
「えっ？ ……な、奈津に……き、訊いたのか？」
「おうよ……何でも相手のチンポがでかくてよぉ、すっげーえ、気持ち良かったらしいぜぇっ♪」
　康輔がそう言った瞬間、また奈津の肘が彼の鳩尾（みぞおち）目掛けて動いた……ような気がした。
「お、お、おいっ！ ……康輔、い、い、いま、また、奈津の肘がっ!?」
　しかし、康輔はそれをスルーして話を逸らす。
「――んだよぉ？ ……挿（い）れたくねえのか？」
「だ、だ、だってさ……ね、眠ってる相手と……そ、そ、そんなコト……」

「ヒロよぉ？　……昼休みにナツと委員長に散々バカにされて、悔しくねえのかよ？
……丁度ここに『眠り姫』……いや、『姫』ってタマじゃねえが『眠りナツ』がいるんだからよ、仕返ししてやる絶好の機会だろうが？」
「だ、だけど……あ、後でバレたら……」
「心配いらねえっての……あの睡眠薬は三時間は起きねえって優れモンよっ♪」
「……うっ……」
それでもまだ覚悟完了していない寛和を、ちろん、と見遣って康輔が言った。
「それじゃあ、チェリー・ヒロが直ぐに突っ込めるように、オレ様がた～っぷり舐めてやっからよぉ♪……まあ、それっくらいは、させて貰わねえと……なっ？」
何故か奈津に言い聞かせるように口にだして康輔は彼女の身体を教室の床に横たえた。そして、康輔はそのまま大股開きに奈津の両足を押し広げてしまったのだ。
「……」
言葉を失った寛和だったが視線はショーツを横に摺らされた奈津の剥きだしの秘唇に釘付けだった。
「初めて見る訳でもねえだろが？」
「は、は、初めてに……き、決まってる…だろ…」

「んっ？…（ヒロのヤツ、こないだ飲んだあの夜の事、マジで覚えてねえのかよ？）……でもよ、お医者さんゴッコした時も 一緒に弄ったじゃねえか？ ……ナツも最初は嫌がってたクセに、指入れて弄ってると生意気に黄色い声なんぞあげてよぉ？」
「い、いつの話をしてるんだよっ!?」
「なんだよ……あれ以来、見せて貰ってねえのか？」
「あ、ある訳 ないだろ？ ……って、康輔……お、お前……み、見せて貰った……コト…あ、あ、ある……のか？」
「んっ？ ……っとぉ…（やべっ！）…そりゃあ ノーコメントだ……ま、まあ、ナツに訊くんだな？」
（く、くそぉ……み、見せて貰ったんだな……って言うか……な、な、奈津と……し、し、しちゃったのかっ!?）
「見てみろよっ！ ……あの頃は つるっつるの縦スジ一本だったのによ……こんなに陰毛も生い茂らせてよぉ……」
そう言いながら康輔は下草を、もしゃ、くしゃ、と弄(まさぐ)りながら続けた。
「ドテ高のこんなエロマンコに成長してくれて……お父さんは嬉しいぜっ！」
「な、なに莫迦な事……言って……」

「ほんじゃ、大人マンコに成長した〝中身〟もヒロに見せてやらねえとな……ええか、ヒロに見せるんだから暴れるんじゃねえぞ？」
何故か言い聞かせるように『眠り姫』に声を掛ける康輔に、期待半分途惑い半分で寛和が言った。
「お、おい……ね、眠ってる相手に……な、ナニ、確認してるんだよ？」
「い、いや……まあ、その……す、睡眠学習……ってなモンよぉ！」
そして、訳の判らない言い訳をした康輔は奈津のショーツを膝まで摺らして片足を抜くと、また大股開きにその両足を押し広げてしまった。
「ほれよ、ナツのマンコ大公開っと♪」
そのまま両手を奈津の秘唇に宛がった康輔は躊躇(ためら)いも見せずに、くぱあっ、と左右に寛げてしまったのだった。
「ほひょおぅっ!?」
奇矯な声をあげた寛和が顔を寄せる。鼻息が掛かった所為かどうか、奈津の内股が、ぴく、ぴくくっ、と震えたが『睡眠学習』が功を奏したのか（笑）蹴りは返ってこなかった。
しかし――、

寛げられた《膣口》から愛液が、たら～～～～っ、と会陰部を垂れ落ちて奈津の喉から微かな声が洩れた。
「……ひぃ……」
「お、お、おい……い、今……こ、声…聞こえなかったか？」
「――んっ？ ……気のせいだろ？ ……それより、オレさまがちいっと弄っただけで、見てみろよ、もうこんなに、ぬる、ぬる、になってるぜぇ♪」
康輔の両手の指で目一杯左右に押し広げられた小陰唇の内部が、溢れでる愛液で卑猥に濡れそぼっていた。
「どれ、膣内(なか)はどんなかな？」

申し訳ありませんが体験版はここまでです。
こちらの体験版にて、作品の雰囲気などをご確認戴けたらと思います。

お気に召しましたら、本篇もどうぞ宜しくお願い致します。